

7. 丹沢山地におけるニホンカモシカの生息密度

永田幸志¹⁾・羽澄俊裕²⁾・瀧井暁子²⁾

Density of Japanese Serow in the Tanzawa Mountains

Koji Nnagata, Toshihiro Hazumi & Akiko Takii

要約

丹沢山地におけるニホンカモシカの生息状況を把握するため、生息密度調査を行った。調査は区画法によるニホンジカの生息密度調査時にニホンカモシカの日撃数も合わせて記録して行った。調査結果から、丹沢山地におけるニホンカモシカの生息密度は最大で 1.4 頭 / km² であり、同時に調査されたニホンジカの生息密度と比較して低く、全国平均と比較しても低い密度で生息していることが明らかとなった。

(1) はじめに

丹沢山地におけるニホンカモシカ *Capricornis crisopus* (以下、カモシカ) は、柴田 (1964) による目撃記録の記載や、山口ら (1999) のアンケートによる分布調査以外にはこれまでほとんど生息状況の調査が行われなかった。同じ偶蹄目のニホンジカ *Cervus nippon* やイノシシ *Sus scrofa* と比べ、目撃する機会も少ないことから、生息数は少ないと考えられるが、基礎的な資料がほとんどないため推測の域を出ない。今後の保護管理を検討するためには、まず、基礎的な生息状況を把握する必要があるため、今回、生息密度の調査を行った。

(2) 調査地域

調査地域は神奈川県厚木市、伊勢原市、足柄上郡山北町、足柄上郡松田町、愛甲郡愛川町、愛甲郡清川村、津久井郡津久井町 (平成 16 年度現在) である。調査地は、標高 100m 程度の山麓域から標高 1600m の山頂域まで、丹沢山地全域に設定された。

(3) 調査方法

神奈川県では、平成 15 年度以降、ニホンジカ保護管理事業のモニタリングとして、ニホンジカの生息密度調査を区画法 (Maruyama & Furubayashi, 1983) により毎年実施している。本調査は、平成 16 年度、17 年度に実施されたニホンジカ生息密度調査時に記録されたカモシカの日撃頭数から、生息密度を算出して行った。

調査地は、ニホンジカ保護管理計画 (神奈川県, 2003) に示された管理ユニットごとに 1 ~ 2 ヶ所づつ設定し (地形等の条件により設定できなかった一部の管理ユニットを除く)、平成 16 年度、17 年度にあわせて 49 ヶ所で行った (図 1)。なお、調査地のうち札掛地区は、NGO である丹沢けものみちネットワークが調査を実施した。調査時期は、森林内の見通しがよくなり精度の高くなる落葉後であり、11 月下旬から 1 月下旬にかけて調査を実施した。調査地域は急峻な所も多く、調査時に危険を伴うため、あらかじめ踏査ルートを設定して行った。調査時間は 1 時間 30 分とし (丹沢山地区は 2 時間)、踏査ルート上で目撃したカモシカの頭数を発見時刻と共に地図上に記録した。調査時には

各調査員がトランシーバーで連絡し合い、目撃個体の重複を確認した。また、調査結果の集計時にも、目撃時間と目撃場所から重複して目撃したと判断できる個体については、重複カウントを消去して集計を行った。

(4) 調査結果および考察

各調査地の調査結果を図 2 に示した。平成 16 年度、17 年度共に調査の実施された調査地については、密度の高かった調査結果を図示した。また、東沢地区については、平成 16 年度、17 年度の調査時は目撃がなかったが、平成 15 年度の調査時には目撃があったため、平成 15 年度の調査結果を図示した。カモシカの日撃があったのは、49 調査地中 15 調査地であり、最大生息密度は玄倉北東地区の 1.4 頭 / km² であった。同時に調査の行われたニホンジカの生息密度が 20 頭 / km² 以上になる場所があったこと (野生動物保護管理事務所, 2006) と比較して、丹沢山地では、カモシカは極めて低い密度で生息していると考えられた。カモシカは当歳子をつれているメス以外は、ほとんど単独かつ、縄張りをもって生活する (岸本, 1996; 落合, 1992) ため、ニホンジカのように極端に高密度化することは少ないが、1980 年代始めの時点の全国平均値 2.63 頭 / km² (環境省, 2000) と比較しても、低い密度で生息していると考えられた。

全国的には、長野県、秋田県、岩手県等でカモシカによる農林業被害が発生しており、保護管理計画が策定されているが、現在、丹沢山地ではカモシカによる農林業被害は報告されていない。密度依存的に被害が発生するシカと異なり、カモシカは低密度でも被害が発生することがある (環境省, 2000) が、現段階では、非常に低い密度で生息していることから、ナワバリ内に造林地等があるなど、特別な場合を除けば被害が発生する可能性は低く、その希少性から保護をしていく必要性が高いと考えられる。しかしながら、丹沢山地のカモシカについては、行動圏や環境利用等が全く不明なため、今後、生息状況や生態をさらに詳しく調査し、保護の手法等を検討することが必要と考える。

文献

環境省, 2000. 特定鳥獣保護管理技術マニュアル (カモシカ編), pp.34.

岸本良輔, 1996. ニホンカモシカ. 伊沢紘生・川道武男・粕谷俊雄編, ニホン動物大百科 2 哺乳類 II, pp.106-111. 平凡社, 東京.

1) 神奈川県自然環境保全センター 2) (株)野生動物保護管理事務所

Maruyama, N & K. Furubayashi, 1983. Preliminary examination of block count method for estimating number of sika deer in Fudakake. *Journal of Mammalogical Society of Japan*, 9: 274-277.
 柴田敏隆, 1964. 丹沢山塊の哺乳動物. 国立公園協会編,

丹沢大山学術調査報告書, pp.338-343. 神奈川県.
 落合啓二, 1992. カモシカの生活誌. 226pp. どうぶつ社, 東京.
 山口喜盛・中村道也・渡邊憲子, 1998. 丹沢山地におけるニホンカモシカの生息状況. *BINOS*, (5): 23-30.



図1. 生息密度調査地
 図中の区画はニホンジカ保護管理ユニット。札掛は NGO により調査が実施された。

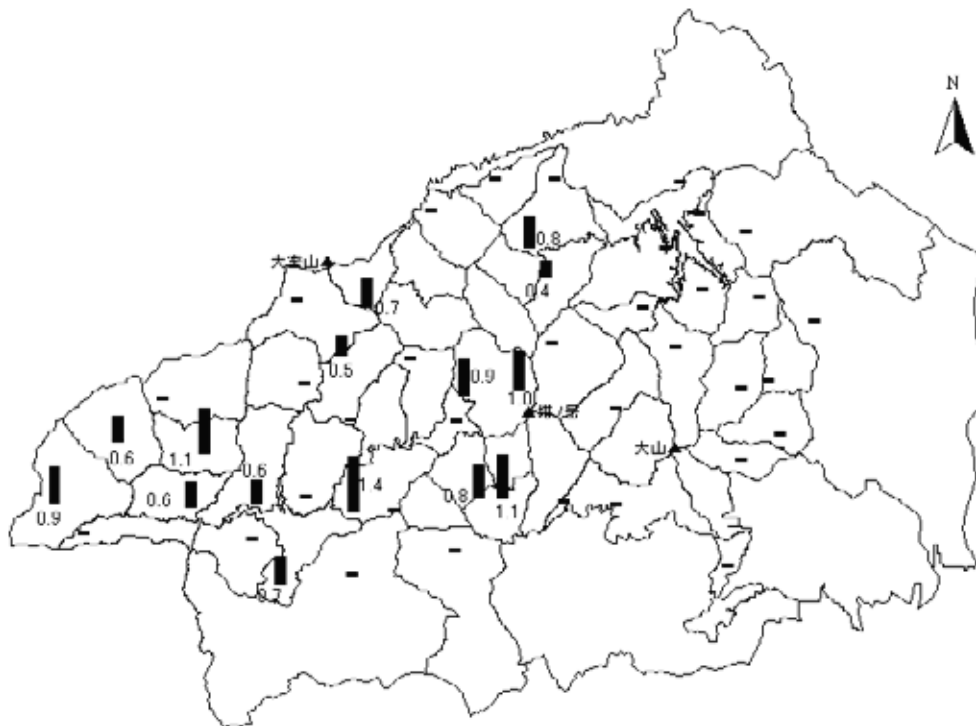


図2. ニホンカモシカ生息密度 (頭 / km²)
 数値の記載されていない棒グラフはカモシカの目撃されなかった調査地